



■ システム認証事業本部

Case Study: コクヨ株式会社

アジアグローバル戦略への布石として、
CSR 報告書環境パフォーマンスデータ
レビューを刷新。

KOKUYO

コクヨ株式会社 -大阪市 <http://www.kokuyo.co.jp/>

環境ブランド戦略と第三者検証

ビューローベリタスジャパン株式会社(以下、ビューローベリタス)は、オフィス・文具メーカーの**コクヨ株式会社**から、今年度、CSR報告書の環境パフォーマンスデータの第三者レビューを委託された。その背景にあるのは「アジアグローバル企業戦略」だ。今回のケーススタディでは、アジアへの進出を加速させる企業にビューローベリタスがレビューを託された背景と、そこに求められるパフォーマンスについて考えてみよう。

まず、はじめに、同社が環境パフォーマンスデータの第三者検証を始めたきっかけから説明しよう。文具事務用品を製造・販売する同社は 1991 年に「廃棄・再資源化対策委員会」を設置。以来、現在に至るまで環境対策は経営上の優先課題として先進的な活動を行っている。その典型的な例が、同社が提案する「エコライブオフィス」。



エコライブオフィス

エコでありながら、同時に働く人のクリエイティビティーも高められるオフィスづくりを提唱し、環境への取り組みをビジネスモデル化する環境ブランド戦略にも先んじている。また「エコバツ」というユニークな取り組みもある。これはコクヨ独自の環境基準を設けて、「つくる時」「はこぶ時」「つかう時」「すてる時」、そのいずれかひとつでもクリアしていなければ、その自社商品にエコバツマークを付けて見直すというもの。スタート時の 2008 年には家具で 25%、文房具で 48%あったエコバツ商品だが、2011 年には、より厳しくなった新基準においてもゼロを達成した。商品開発部署や営業担当それぞれのエコバツ 0 への取り組みは、ホームページ上でも紹介されていて興味深い。

同社は 1999 年に「環境報告書」を初めて発行、翌年の 2000 年版から早くも環境パフォーマンスデータの第三者検証を会計監査法人に委託した。これは非財務情報の開示の重要性を認識し、その信頼性を高めることが必要と感じたからだ。



プロセス重視のアプローチに評価

2011年、同社は「アジア企業」を目指すという経営方針が出された。その結果、工場や営業所など海外の事業所が今後、間違いなく増えることが予測され、進出した相手国における環境パフォーマンスデータの評価(特にCO2排出量の開示)が企業責任として生じると考えたのだ。さらに言うなら、それは同時に、海外諸国における環境パフォーマンスの測定と評価のノウハウを蓄積することでもある。

こうした問題意識と実際の評価作業を共有できるのは、海外ネットワークを広くもち、各国の環境政策やデータの把握が得意なグローバルな審査機関とのタイアップである。そこでグローバルネットワークをもつビューローベリタスにパートナーシップを求めたのだ。

今回、レビューの対象となったのは、本社、国内工場2ヶ所、流通拠点1ヶ所、そしてマレーシア工場の合計5ヶ所。また評価は「役割と責任、力量」「データの計測・収集」「データの集計・計算」「他の組織との関係」「ファイル、記録の保管」「チェック」の6つのプロセス別にリスク評価が行われた。同時にタイ工場環境・労働安全衛生の遵法監査を実施した。



本社統括部 CSR・環境グループ 中森功氏

求められる、国際対応力

では、同社がビューローベリタスに新たに求めたのは、どのような「仕事」だったのか？次にそれを見てみよう。それは、大きく次の3点だった。

- ①レビュー審査の負担を減らしてほしい。丁寧な審査をしながらも、現場に大きな負担を生じさせない審査方法を開発し、効率のいい審査を行ってほしい。
- ②同社の置かれたリスクレベルはどれぐらいなのか？たとえばもしもパフォーマンスデータに誤りがあったときに、同社が負う数値的な大きさのリスク度合いはどれぐらい深刻なものか？他業種と比較してはどうか？その概評をしてほしい。
- ③海外遵法審査では、対象国の評価基準や該当法令を明らかにしてほしい。環境配慮についてのどのような法令があるのか、ないのか。また運用状況はどうか。



本社統括部 CSR・環境グループ課長 齊藤申一氏

今回のビューローベリタスの審査において特に評価が高かったのは①だった。現場の負担を減らし、審査のために手を止める人がなるべくないようにするために、事前にヒアリングやリサーチを行い、状況を把握してから審査を行ったことで工程数が激減し、よりスピーディーで的確な審査を行うことができたのだ。この点は、結果として審査対応における人件費のコストダウンにもつながった。



BUSINESS VISION

BUREAU
VERITAS

BUREAU VERITAS JAPAN CASE STUDY



また審査自体についても「数値を重要視する会計監査法人のアプローチに比べて、ビューローベリタスはプロセスを重要視する審査であり、着地点は一緒でもプロセスについての指摘があったことが、現場にとっては分かりやすかった」と本社統括部 CSR・環境グループの齊藤申一課長は言う。

③についてはレビュー自体とは直接関係がないかもしれないが、クライアント企業としてはぜひ応えてほしいと思う切実なニーズだろう。海外進出を目指すメーカーにはなくてはならない情報だが、同時に現地に関する見識やネットワークがないと集めにくい情報でもある。いきおい、グローバルな検証機関に期待される重要なパフォーマンスだろう。

国内市場の緊縮や歴史的円高にも背中を押されて、海外進出するメーカーが加速度的に増えることが予測される昨今、こうしたきめ細かいサポートを可能とするハイクオリティなネットワーク力は、第三者検証機関に、今までに増して求められる機能となりそうだ。